世界遺産を通して生活豊かに

世界遺産は現在、世界中に851件と数多くありますが、日本には14件しかありません。世界遺産を持つということは、世界的に認められたブランドを持つということで、地域の誇りになると思います。文化的・歴史的なものに興味を持つ人が来て、天草の歴史や文化を学ぶ。逆に来てもらった人に、国や地域の文化について話してもらう。このような文化を中心とした交流をしていくのか。それとも、ものが重要だから教会や風景をきちんと残す、あるいは町並みを守るということにするのか。どこに重点を置くのか、さまざまな考えがあると思います。

以前、イギリスのことに詳しい林望（はやしのぞむ）先生という方から、こんな話を聞いたことがあります。東京や大阪などの大都市に行くと、ガイドブックが必ず売られている。もちろん、ロンドンにもガイドブックはあるが、19世紀に作られたものの復刻版が売られているそうです。なぜかというと、風景がほとんど同じだから、100年以上前に作られたガイドブックが今でもそのまま使えるそうです。

林先生が何を言いたいのかというと、「日本人は歴史感覚が弱すぎる」ということです。私なりに解釈すると、今、ロンドンに住んでいる人たちが見ている風景は、自分の父や母が見ている風景と同じだ。おじいさんやおばあさんが見ていた風景とも同じだ。さらに、自分の子どもや孫が見るであろう風景とも同じだ。要するに、世代を超えて、まち・歴史・自然について、同じ土俵で人が見ているということです。

日本などではずいぶん前から世代間の断絶ということがいわれていますが、「あそこになんとかがあったろう」と自分の子どもと話そうと思っても「そんなものは今はない」という話になる。歴史を同じように語れなければ、未来についても同じようには語れない。林先生の話を聞いて、世代を超えた縦のつながりが非常に重要であると感じました。

今回の世界遺産を考えるときに何を考えればいいのか、誤解のないように話をしておきます。結果として、来る人が増えて、お金も落ちてというようになればいいと思いますが、世界遺産登録をきっかけに、そこに住んでいる皆さんが生活を豊かにする、ということを考えていくことが必要なことだと思います。

人間は生きている以上、自分の歴史や履歴があります。小学生のとき、あそこに行って、住んでいたところはああいうところで、というその履歴はどこかの場所に刻まれているわけです。各個人が刻んでいく場所や空間の履歴というものは、大切にしなければならない。大げさに言うと、皆さんの両親が刻んだ空間の履歴も大切にすれば、両親がいなくなってもいっしょに生きていける、ということです。

崎津教会などの教会について言えば、明治から昭和初期にかけて建てられたものが多いですから、自分の親の履歴とも重なるでしょう。おじいさんやおばあさん、自分の孫とも重なっていくでしょう。キリスト教の信者でなくても、その教会は風景の一部としてあり、そこに自分たちの家や親せきの家があるわけですから、皆さんにとっても、共通の財産だと考えなければならないと思います。

いっしょに仕事をする機会が多い熊本出身の方がいるのですが、その人が「親せきが崎津にいるのですが、昔は馬車タクシーがあり、4人乗りの馬車で行きました」と話していました。この馬車が、彼にとっての履歴になっていて、それと通じて、自分のふるさとや親せきとつながっている。そのように考えていくと豊かな感じになるのではないでしょうか。人・お金・ものは後からついてくる。私はそう思います。

パネルディスカッション
天草における世界遺産登録

パネリスト

聖トマス大学大学院教授
五野井 隆史 氏

日本二十六聖人記念館館長
デ・ルカ・レンゾ 氏

熊本県立大学理事長
蓑茂 壽太郎 氏

天草市長
安田 公寛 氏

コーディネーター

政策研究大学院大学教授
篠原 修 氏

〔篠原氏〕
いろんな専門・立場のパネリストの皆さん4人に、「世界遺産をどのように考えているか」「天草をどのように思っているか」などについて話していただきます。

〔五野井氏〕
郷土の歴史を知るということは、自分を知ることにもつながりますので、世界遺産にかかわりながら、天草のキリシタンの歴史について勉強していただきたいと思います。その中で、天草が世界遺産にどのようにかかわっていくか、ということを考えてほしいです。

〔レンゾ氏〕
アルゼンチンの教会で20年間過ごしましたが、教会とそこを訪れる人とのかかわりによる大きな問題は、キリスト教信者とそうでない人との摩擦が起きること。しかしその一方で、教会が出会いと触れ合いの場となることがあります。世界遺産の話を通して、そのようなことが見えてくるのではないかと思います。

〔蓑茂氏〕
人吉で生まれましたが、大学のときから38年間、東京に住んでいました。その後、また熊本に住んで、天草や阿蘇など、熊本にはいいところがあると感じています。現在、熊本県立大学で理事長を務めていますが、専門の造園の立場から見ると、天草をはじめ、熊本や九州には磨くところがたくさんあります。今回のシンポジウムもそういう磨き始めになるのではないかと思っています。

〔安田氏〕
平成16年5月、崩壊の危機に直面した崎津天主堂を守る基金運動が天草で始まりました。そしてその年の7月、長崎の教会群を世界遺産にする会の方々が崎津天主堂を視察され、その折りに、長崎の教会群を世界遺産にしようとされていることを知ったのです。

その後、東京でも、長崎の教会群を世界遺産にする東京グループという会の人が、収益を基金に充てようと「大いなる遺産　長崎の教会」というテーマで写真展を開催されました。そこで崎津天主堂や大江天主堂も掲載されている写真集をいただいたとき、撮影された建築写真家の三沢博昭さんが、両教会の価値の偉大さを切々と語られていたのが印象的でした。そのとき、崎津天主堂と大江天主堂は世界遺産に匹敵するものだと思いました。

その後合併し、新市のまちづくりのテーマを「日本の宝島・天草の創造」としました。埋もれている宝を見い出し、見直し、磨き上